様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：８４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２４８８

研究課題名（和文）大正期における児童出版文化史の研究－実業之日本社の果たした役割

研究課題名（英文）Study on the History of Children's Publishing Culture: The Role of Jitsugyo no Nihonsha

研究代表者
土居　安子（Doi, Yasuko）

一般財団法人大阪国際児童文学振興財団・その他部局等・総括専門員

研究者番号：００４１６２５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：大正期の児童文学・児童文化分野の児童出版文化の成長と発展に寄与した実業之日本社（出版社）を中心に、当時の児童出版の状況について研究を行った。
まず、研究の基盤となる『少女の友』『日本少年』『幼年の友』の雑誌内容目次を作成すると同時に、実業之日本社の雑誌内容の研究、編集者についての研究、雑誌の読者研究、他誌との比較研究、児童文化と実業之日本社の雑誌の関係の研究などを行うことによって、実業之日本社の児童出版史の中で位置づけを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
活字メディアが大きな変化をとげ、雑誌文化が衰退していきつつある現在、大正期の実業之日本社の雑誌のありようをさまざまな角度から研究することによって、大正期に子どもたちがいかに物語や情報を得ていたのか、児童文学をいかに享受していたのか、いかに読者ネットワークが作られていったのかなどが具体的かつ精緻な研究から明らかになった。
加えて、研究に欠かせない雑誌の内容細目データを作成したことによって、出版史研究、児童文学研究、児童文化研究等の発展の基盤づくりに寄与することができた。

研究成果の概要（英文）：This is a study of the history of children’s publishing with a focus on Jitsugyo no Nihonsha, a publisher that contributed to the growth and development of the publishing of books and magazines in the Taisho period.
Our research project archived the contents of magazines such as Shojo no Tomo, Nippon Shonen and Yonen no Tomo. We used this data to study the contents of magazines by Jitsugyo no Nihonsha, the editors employed by the company, the readers of the magazines, and the relationship between children’s culture and magazines of Jitsugyo no Nihonsha. We also compared the magazines of Jitsugyo no Nihonsha with those run by other publishers. From this research we were able to place Jistugyo no Nihonsha within the context of the history of children’s publishing.

研究分野：児童文学

キーワード：児童文学　児童文化　児童出版史　実業之日本社　児童雑誌研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究プロジェクトでは、明治期の博文館を中心とした児童出版文化史研究を行っており、児童出版史を継続的に調査・研究するという目的で、大正期の実業之日本社を中心とした児童出版史の研究を実施した。

これまで、『少女の友』についての研究は少女文化研究や少女向け雑誌研究からの積み重ねがあり、『日本少年』についても作家や編集者、投稿に関する研究など、様々な分野からの積み重ねがあったが、実業之日本社の児童出版物を包括的にとらえて、児童出版文化全体の中での位置づけを試みた研究は行われていなかった。

２．研究の目的

本研究は、日本近代児童文学史上、成長期にあたる大正期の児童文学・児童文化分野に光をあて、児童出版文化の成長と発展に寄与した実業之日本社（出版社）を中心に、当時の児童出版の 状況について研究するものである。実業之日本社が大正期においてどのような考えのもとに児童出版物を刊行し、いかに受容されたか、同時期にどのような出版社が存在し、いかなる図書・雑誌が出版され、それによって児童出版文化がいかに成長したのかを、児童出版史の中で位置づけ、今日的意義についても考察する。

３．研究の方法

研究対象となる実業之日本社発行の雑誌の内容作目を作成し、散逸している資料を収集しながら、それらを各研究者がさまざまな視点から調査・研究した。

研究会を定期的に開催し、研究成果を共有し、議論して、個々の研究内容の充実を図った。

４．研究成果

本研究の成果としては、以下の点が挙げられる。

（１）資料体制の整備

まず、大正期を代表する出版社である実業之日本社の、以下の雑誌内容目次を作成できたことである。

①『少女の友』1 巻 3 号（1908 年 4 月）～38 巻５号（1945 年５月）まで　合計 357 冊
　全 23,353 件

②『日本少年』18 巻 10 号（1923 年 10 月）～30 巻 11 号（1935 年 11 月）まで　合計 60 冊
　全 4,567 件

③『幼年の友』１巻８号（1909 年 8 月）～21 巻 10 号（1929 年 10 月）まで　合計 128 冊
　全 3,119 件

これまでに蓄積してきた博文館等他社のデータを加えることで、大正期の雑誌内容目次がより充実し、明治期から大正期にかけての児童出版文化を研究するうえでの基礎的データが整備できたといえよう。

また、実業之日本社が所蔵している『少女の友』を拝借し、撮影することによって、大阪府立中央図書館国際児童文学館（以下、国際児童文学館とする）の所蔵分を合わせると、かなりの『少女の友』が一挙に調査できるようになり、加えて兵庫県立歴史博物館入江コレクションの閲覧により、研究の基礎となる資料体制を作ることができた。

（２）雑誌内容の研究

こうしたデータを活用することで、大正期に花開いた実業之日本社の雑誌研究が多様な観点から行えるようになった。具体的には、日本児童文学学会　第 57 回研究大会（2018 年 11 月 25

日、於：文教大学）におけるラウンドテーブル「視覚的要素からみた実業之日本社の雑誌」にて、研究メンバーである松本育子が「表紙から見た『幼年の友』」、土居安子が「表紙から見た『日本少年』」を報告した。松本は、表紙の構図の特徴と変遷を検討し、そこから実業之日本社における幼年期の雑誌の位置づけを考察した。土居は、1914 年と 1920 年の表紙を他誌の表紙と比較することによって、共通点と相違点を明らかにし、『日本少年』の特徴を浮かび上がらせた。以上に加えて、実業之日本社についてより多角的に迫るために、『少女の友』の研究者である内田静枝氏に「視覚的要素からみた『少女の友』」という基調講演をしていただき、年齢・性別の異なる実業之日本社の三誌について、共通点や相違点を考察する討論を行った。その詳細は『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 32 号（2019 年 3 月）に掲載している。表紙という雑誌の顔とも言うべき要素を検討することで、三誌の特徴が概観できると同時に、共通する画家や編集者が関わっていることがより明らかになって、実業之日本社らしい雑誌とは何かについて多くの視点を得ることができた。松本は、実業之日本社の雑誌の表紙研究を発展させ、「『幼年の友』『小学女生』『少女の友』の表紙絵からみた視覚表現－大正期を中心に」という題で、対象年齢の異なる三誌の表紙の特徴をまとめ、その共通点と相違点を『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 33 号（2020 年 3 月）にまとめた。加えて松本は研究成果を応用し、「『赤い鳥』と童画家たち展」（場所：刈谷市中央図書館 2018 年 10 月 27 日（土）～11 月 25 日（日））を企画展示した。

（３）他誌との比較

実業之日本社の雑誌像、出版文化像を明らかにするためには、他社の雑誌像、出版文化像と比較することが一手法として考えられる。土居は、2017 年度には『日本少年』の創刊号を『少年世界』『少年』『少年界』と比較した。それによって『日本少年』の創刊時には、他誌との違いとして、大人向け雑誌『実業之日本』にある自助（セルフヘルプ）の思想が貫かれており、経済戦争に打ち勝つ少年像が描かれていることが特徴として明らかになった。

2018 年度には前述したように『日本少年』の全盛期とも言える 1914（大正３）年と 1920（大正９年）に絞って他誌（『少年世界』『少年』『少年倶楽部』『少年少女譚海』）との表紙の比較を行い、大正期の少年観と有本芳水の人気に共通する抒情的ともいえる「内にこもった少年像」が描かれていることが特徴づけられた。

2019 年度は、「近代日本児童出版文化史の研究－明治期における博文館出版文化の内容と特質」（科学研究費補助金・基盤研究(C)　研究課題番号：10416258，代表者：遠藤純）の継続研究として、雑誌メディアの柱の一つである読者投稿欄の検討を行った。『日本少年』の創刊時である 1906（明治 39）年から 1935（昭和 10）年までの５つの時期の七誌（『日本少年』『少女の友』『少年世界』『少女世界』『少年』『少年倶楽部』『少女倶楽部』）の読者投稿欄を比較し、時代と実業之日本社をはじめとする発行者と読者対象の性別によっていかに共通点と相違点があるかを検討した。そこからは、明治期に博文館に倣って雑誌を創刊し、大正期に花開き、昭和期に大日本雄弁会講談社に追い越されていく『日本少年』の様子を読み取ることができた（第 58 回日本児童文学学会の口頭発表を経て「『日本少年』の読者投稿欄―他誌との比較を通して―」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 33 号に収録）。

（４）多様なアプローチ

研究メンバーの浅岡靖央は、実業之日本社発行の『幼年の友』の編集者であった岸辺福雄と『幼年の友』の関係について研究し、雑誌の編集長、内容、目次構成の変遷等について研究会での口頭発表を行う（2018 年 8 月、2019 年 12 月）と同時に、『赤い鳥』で花開いたと言われている子

どもたちの自由画が『幼年の友』で既に岸辺によって評価されていることを明らかにし、従来の児童文化研究の見直しを迫った（「雑誌『幼年の友』と岸辺福雄―観察画から感想画そして自由画へ―」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 32 号所収）。雑誌研究の中でも児童文化、とりわけ児童画に関わる研究は数少なく、今後の発展が期待される。

『幼年の友』の内容についての研究としては、研究メンバーの一人である酒井晶代の研究会での口頭発表「大正期の絵雑誌に描かれた西洋菓子―『子供之友』と『幼年の友』を中心に―」が挙げられる。お菓子を切り口にした比較雑誌研究としてユニークで、その成果は、「大正期の子どもたちとキャラメル―絵雑誌『子供之友』掲載記事を手がかりとして―」（『愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要』第６号所収）としてまとめられた。また、実業之日本社発行の雑誌と共通する漫画家たちが描いた「森永昆虫漫画集」に注目し、「森永製菓の児童文化関連事業（３）――森永昆虫漫画集(昭和 11～12 年)の事例を手がかりとして――」（『愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要』第 7 号所収）として発表された。

（５）『少年』、巖谷小波と実業之日本社の活動

このように、実業之日本社の特徴を明らかにするためには、他の出版社やその雑誌の研究が不可欠であるが、研究メンバーの遠藤純は、明治期～大正期に人気を博していた時事新報社の『少年』の細目を発表した（『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 31～33 号）。これらの知見は、研究会の発表に対する助言として発揮されたが、この成果を基礎データとして、雑誌『少年』研究、時事新報社研究、ひいては、実業之日本社との比較研究が発展することを期待したい。

遠藤はまた、実業之日本社の雑誌についても執筆しており、明治・大正期の児童文学のキーパーソンであった巖谷小波について継続研究を行っており、小波が東京のみでなく、日本全国に出向いて児童文学・児童文化の普及に貢献していることを明らかにしている。2019 年度は、大正期から昭和期にかけて大阪の児童文化に関わった高尾亮雄と小波の関係について調査し、日本児童文学学会第 58 回研究大会で口頭発表した。当時の児童出版状況を明らかにするためにも貴重な研究であり、さらなる発展が期待される。

巖谷小波研究は、研究メンバーの目黒強も継続して行っており、小波を切り口に、実業之日本社『日本少年』創刊期の小説観（「明治後半期における文士の社会的地位をめぐるポリティクス－巖谷小波の文士優遇論に着目して－」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 31 号所収）、少女雑誌観（「明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリティクス－〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を事例として－」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』11 巻 11 号所収）、お伽噺観（「明治期の読書論における〈空想〉の排除と包摂－お伽噺論を中心として－」　『子ども社会研究』25 号所収）、課外読み物観（「大正期における通俗教育にみる課外読み物の統制」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第 33 号所収）などを明らかにした。

また、目黒はこれらの知見を使って研究会で「『日本少年』における「悲哀小説」と「滑稽小説」の諸相」について研究発表し、『日本少年』の小説観を明らかにすると同時に、「大正期における課外読み物目録にみる『日本少年』主筆の位相」と題した口頭発表を行い、『日本少年』の主筆の児童出版界における位置づけを行った。加えて目黒はこれまでの研究成果を単行書『＜児童文学＞の成立と課外読み物の時代』（和泉書院）にまとめ、第 43 回日本児童文学学会奨励賞を受賞した。

（６）子どもの生活の中での雑誌の読まれ方

実業之日本社の雑誌を子どもがいかに読んでいたのか、子どもたちはどのような暮らしをしていたのかを知ることも重要な課題である。研究メンバーの柿本真代は、明治～大正期の日記研究についての口頭発表を行う（「夏休みと子どもの日記帳」（「日記の館１号館」平成 30 年 夏の開館（2018 年 8 月）於：日記の館１号館）と同時に、研究会では、「児童出版文化としての日記帳―博文館、実業之日本社を中心に―」と題する口頭発表を行い、『少女の友』における日記読物のありようや、実業之日本社の雑誌における日記帳の広告について考察を行った。日記からの児童文学・児童文化の受容研究は新しい視点であり、今後の発展が期待される。柿本はまた、雑誌研究のありようについても、研究会内で問題提起を行い、プロジェクトとしての研究方針について貢献した。

（7）「愛子草書」と『赤い鳥』

実業之日本社の図書・叢書については、「愛子叢書」が挙げられる。研究メンバーの小松聡子は、「愛子叢書」の中で少女がいかに描かれていたかという視点で、研究発表を行った。加えて大正期の児童文学を考える上で雑誌『赤い鳥』は視野に入れるべき雑誌であるが、酒井（前出）は、研究会において「『赤い鳥』と博文館、実業之日本社の比較」というテーマで口頭発表し、共通点と相違点について問題提起を行った。『赤い鳥』については、研究メンバーの宮川健郎も「『赤い鳥』創刊 100 年、記録と感想」（『日本近代文学』〈展望〉(日本近代文学会)第 100 集）を執筆し、研究メンバーの多くが『赤い鳥事典』（柏書房、2018 年）のさまざまな項目に執筆した。これらのテーマは今後さらに発展させることが待たれる。

（8）今後の課題

以上のように、大正期に児童向け出版物を発行し、人気を博した実業之日本社は、大人向け雑誌『実業之日本』『婦人世界』、また、大隈重信が総裁となって「全国小学校児童成績展覧会」を実施するなどのイベントを背景に、博文館の巌谷小波ほどのスター性はないものの、読者のお兄さん的存在の編集者かつ作家集団が幼年から少年・少女向けの雑誌を発行し、人気を博した。大正期の童心主義の影響を受けた作品や投稿が見られ、表紙等視覚的な要素からも明治期とは異なる読者へのアプローチを見ることができた。それは、より商業主義的になったという言い方もできよう。しかしながら、昭和になるにつれ、商業主義的かつ軍国主義的傾向はより強まり、児童文化における雑誌の役割もまた、変化していく。

メディア状況が大きく変化し、出版文化が衰退しつつあるとも言われる現在、雑誌を始めとする児童出版文化をいかに後世に伝えていくか、総合的な児童文化活動をいかに実現していくべきかが問われている。以上を考えるうえで、大正期のありようを検証することは、現代のそれを考えるために極めて有意義であると思われる。これまでの成果を生かし、戦前の児童出版文化をより深く考察し、歴史的視点から現代の児童出版文化、および児童文化のありようについて研究を継続したい。

以上が３年にわたる研究の成果である。今後、本プロジェクトとしてさらに蓄積データを精緻に分析することで、個々の研究者が自ら関心のあるテーマに応じて研究を進めることになろう。かつ、引き続き組織的・計画的に雑誌をはじめとするデータを作成・公開し、基礎的・有用な研究データの作成にも努めていきたいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 土居安子	４．巻 32号
２．論文標題 表紙からみた『日本少年』の特色―他誌との比較を通して―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	６．最初と最後の頁 (1)-(29)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 遠藤純	４．巻 32号
２．論文標題 雑誌「少年」（時事新報社）細目（七）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	６．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松本育子	４．巻 32号
２．論文標題 表紙絵からみた『幼年の友』の視覚表現－前身誌『家庭教育絵は（ば）なし』を含めて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	６．最初と最後の頁 (45)-(60)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅岡靖央	４．巻 32号
２．論文標題 雑誌『幼年の友』と岸辺福雄―観察画から感想画そして自由画へ―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	６．最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 目黒強	４．巻 24号
２．論文標題 明治期の読書論における〈空想〉の排除と包摂－お伽噺論を中心として－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 子ども社会研究	６．最初と最後の頁 245-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 酒井晶代	４．巻 6号
２．論文標題 大正期の子どもたちとキャラメル―絵雑誌『子供之友』掲載記事を手がかりとして―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要	６．最初と最後の頁 66-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土居安子	４．巻 31号
２．論文標題 「日本少年」創刊号に見られる実業之日本社の少年雑誌戦略―他誌との比較を通して―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 遠藤純	４．巻 ３１号
２．論文標題 雑誌「少年」（時事新報社）細目（六）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	６．最初と最後の頁 ★
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 目黒強	4．巻 31号
2．論文標題 明治後半期における文士の社会的地位をめぐるポリティクス－巖谷小波の文士優遇論に着目して－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大阪国際児童文学振興財団研究紀要	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 目黒強	4．巻 11巻11号
2．論文標題 明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリティクス－〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を事例として－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6．最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 土居安子
2．発表標題 「視覚的要素からみた『日本少年』」
3．学会等名 日本児童文学学会第57回研究大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 松本育子
2．発表標題 「視覚的要素からみた『幼年の友』」
3．学会等名 日本児童文学学会第57回研究大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 浅岡靖央
２．発表標題 絵雑誌『幼年の友』と岸辺福雄
３．学会等名 日本児童文学学会第57回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 柿本真代
２．発表標題 夏休みと子どもの日記帳
３．学会等名 日記の館1号館平成30年夏の開館
４．発表年 2018年

１．発表者名 酒井晶代
２．発表標題 大正期の子どもたちと西洋菓子―『子供之友』掲載記事を手がかりとして―
３．学会等名 日本児童文学学会第87回中部例会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

展示:松本 育子 「『赤い鳥』と童画家たち展」場所：刈谷市中央図書館　　2018年10月27日（土）～11月25日（日）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	酒井　晶代 (Sakai Masayo) (10279953)	愛知淑徳大学・創造表現学部・教授 (33921)	
研究分担者	遠藤　純 (Endo Jun) (10416258)	武庫川女子大学・教育学部・准教授 (34517)	
研究分担者	浅岡　靖央 (Asaoka Yasuou) (60788941)	白百合女子大学・人間総合学部・教授 (32627)	
研究分担者	目黒　強 (Meguro Tsuyoshi) (70346229)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	宮川　健郎 (Miyakawa Takeo) (80166123)	一般財団法人大阪国際児童文学振興財団・その他部局等・特別専門員 (84418)	
研究分担者	小松　聡子 (Komatsu Satoko) (90416256)	一般財団法人大阪国際児童文学振興財団・その他部局等・特別専門員 (84418)	
研究分担者	柿本　真代 (Kakimoto Mayo) (40759081)	京都華頂大学・現代家政学部現代家政学科・准教授 (34325)	
研究協力者	香川　雅信 (Kagawa Masanobu)	兵庫県立歴史博物館・学芸課長	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松本　育子 (Matsumoto Ikuko)	刈谷市美術館・館長代理	